

# シャーマニズム研究とヒップホップ 研究を架橋する

国立民族学博物館 人類文明誌研究部 教授

島村一平



# 島村一平 (文化人類学・モンゴル研究)

国立民族学博物館・人類文明誌研究部長・教授

- 1969年7月 愛媛県生まれ。兵庫県西宮市育ち。
- 1993年 早稲田大学卒業後 ドキュメンタリー番組制作会社に勤務。
- 1995年 番組取材で出会ったモンゴルに魅せられ、退社。モンゴルへ留学。
- 1998年 モンゴル国立大学大学院 民族学専攻 修士課程修了
- 2004年 総合研究大学院大学文化科学研究科 博士 (文学、2010年)
- (モンゴルでのべ6年間、留学・調査に従事)
- 2005年 滋賀県立大学人間文化学部に着任
- 2011年 ケンブリッジ大学客員研究員
- 2013年度 日本学術振興会賞受賞 地域研究コンソーシアム賞受賞
- 2020年4月 国立民族学博物館 /総合研究大学院大学 准教授
- 2023年4月 国立民族学博物館 /総合研究大学院大学 教授
- 2023年8月 モンゴル国北極星勲章 叙勲



# 主な研究： 現代モンゴルにおける宗教とナショナリズム



- 論文集『憑依と抵抗：現代モンゴルにおける宗教とナショナリズム』晶文社、2022年。
- はじめに
- 第一部 グローバル世界を呻吟する
  - 1：シャーマニズムという名の感染症
  - 2：地下資源に群がる精霊たち—鉱山開発とシャーマニズム
  - 3：憤激のライム—世界の周縁で貧富の格差をラップする
- 第二部 社会主義のパラドクス
  - 4：秘教化したナショナリズム（1921 - 1953）
  - 5：社会主義が／で創造した民族の英雄、チンギス・ハーン（1941-1966）
  - 6：呪術化する社会主義
- 第三部 連環する生と死
  - 7：シャーマニズム、ヒップホップ、口承文芸—韻の憑依性をめぐって
  - 8：生まれ変わりの人類学—化身ラマたちの世界
- 第四部 民族文化のゆくえ
  - 9：コスプレ化する民族衣装
  - 10：「モンゴル化」する洋装と匈奴デールの誕生
- おわりに

# 1. シャーマニズム研究

## ポスト社会主義モンゴルにおけるブリヤート人の「増殖するシャーマン現象」の研究

社会主義崩壊後、この地域の人口の1パーセントがシャーマンになる現象  
→国際的な研究のHot Spotとしてのモンゴルのシャーマニズム研究  
ハーバード大、ケンブリッジ大、ソルボンヌ大、モスクワ大、ベルン大など  
10人以上 →シャーマン増殖現象は、モンゴル全国へ



長期フィールドワークの結果、  
シャーマンが増え続ける謎が解けた！！

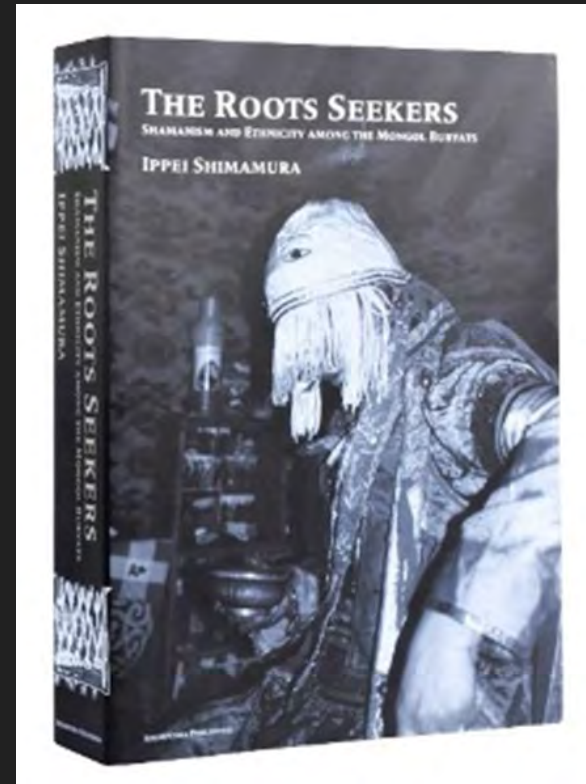


Map 1 Mongolia and the Survey Areas - the Four Aiga Buryat sum

# 『増殖するシャーマン：モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』 春風社、2011年（全576頁）



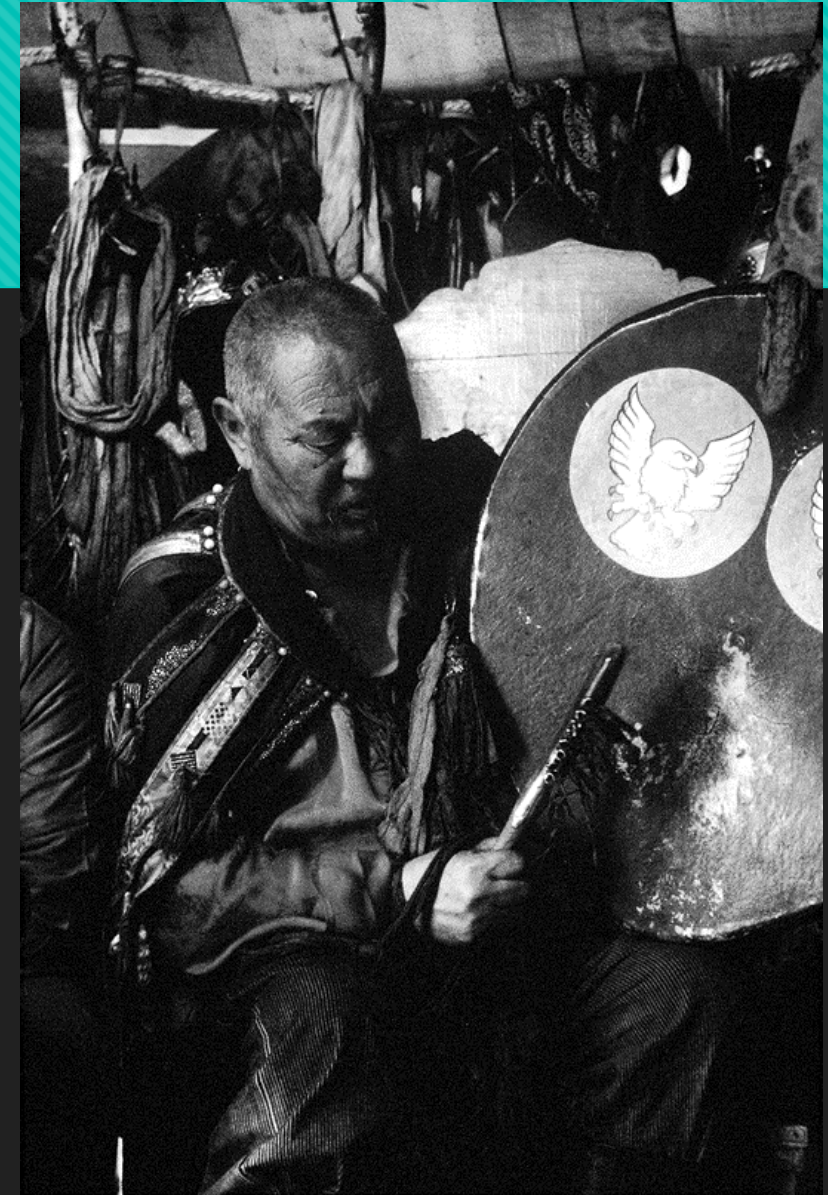
- ◎6年にわたる長期フィールドワークを行うことで、外部の人間が容易に知ることができなかったモンゴルの精神世界に光を当てた。すなわち外部を拒む傾向にあるマイノリティ（ブリヤート人）の世界において、シャーマンに「憑依」してきた霊の語りによって系譜が創造され、それによって新しいエスニシティのあり方が再構築されていることを現地データをもとに明らかにした。
- 「宗教現象」の誕生プロセス
- 「民族意識」の誕生プロセス
- シャーマニズム研究→英語やモンゴル語の書籍・論文で海外発信し高く評価される。
- フランス高等研究実習院（EPHE）に招聘教授として訪仏決定（2024年11月）



## 2. シャーマニズムにおける 精霊憑依の「秘密」

シャーマンに憑依する精霊とは、何なのか？

- ◇ シャーマンの増殖（大衆化）  
→ トレーニング可能な「精霊憑依」
- ◇ ある女性シャーマンの語り
- ◇ 「オンゴドは、人間の姿をした先祖霊とかではなく、言葉そのもの  
では？ 韻を踏んで精霊の召喚歌を歌い唱えているうちに知らない  
うちに言葉が出てくるんです」
- ◇ シャーマンになった私の運転手（40・男）
- ◇ 「太鼓を叩きながら、召喚歌を唱えてるうちに自然と言葉が出てく  
る」
- ◇ つまり、精霊とは、韻踏みで生まれる言葉のことだった。



モンゴル/ブリヤートのシャーマン 2000年

# 憑依における韻

自分が意識して語れる言語とは異なる、意識的に操作できない言語を自動的に語らしめるテクノロジーとしての「憑依」



(撮影：島村一平 ウランバートル市 2001年)



(撮影：島村一平 モンゴル国ドルノド県 2000年)

**口が割れる (am khagalakh)** = 精霊が憑依して言葉を話すようになること  
自分の言葉と「精霊の言葉」を分離させる作業のことでは？

# ★韻踏むシャーマン→精霊も韻を踏んで入ってくる (7' 4 2" ~)



Wondershare  
Filmora

で作成

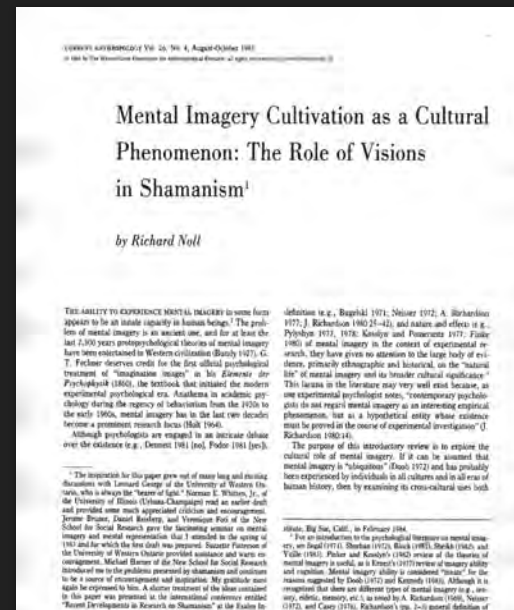
Wondershare Filmora 無料プラン

(撮影：島村一平 ウランバートル市 2001年)



# 3. 韻踏み：従来のシャーマニズム技法研究の盲点

- シャーマニックな「意識変容」の技法は、欧米のネオ・シャーマニズムやトランスパーソナルといったニューエイジ系の人々によって注目
- シャーマンのドラミング（太鼓をたたくこと）と呼吸法（ハーナー1989（1980）、グロフ1989など）
- 大橋力の「ハイパーソニック・イフェクト」（大橋1997、加藤・安本・永沢2017）
- リチャード・ノル（臨床心理学者・文化人類学者）。80年代からシャーマニズム研究に従事し、シャーマニズムを認知科学の立場から想像力の開発（Mental Imagery Cultivation）の技法として捉える新機軸を開拓。
- BUT 「韻を踏む」というテクノロジーに関しては、ほとんど顧みられてこなかった。



# 4. 韻の憑依性：シャーニズムの精霊の憑依とラップのフリースタイルとの類縁性



身体技法としての「韻」は、ヒップホップのミュージシャンたちが「フリースタイル」と呼ぶ即興で韻を踏みながら歌詞を生み出して行く手法と酷似

- 「集中が高まると「神が降りてくる」瞬間というのがあるって、そのときは頭の中でイメージしたラップがパパパパッと完璧に口から出てくる」 (漢 a.k.a Gami 2015: 144-145)
- 「無意識のうちに言葉が入ってくるよ。それが時には自分でもびっくりするようなぴったりのライムだったりするんだよ」「メロディーよりリズムが重要だ。トラックのリズムが鳴り始めると、言葉が降りてくる。リズムは人の心を震わせる力があるんだ」 (モンゴルのラッパー、DESANT)

① 「韻の憑依性」＝押韻がもたらす、あたかも憑依のように無意識に自動的に発話する性質。

② 韻⇒音声優先 散文⇒意味優先 ⇒自分の意図せぬ意外な言葉が生まれる。  
シャーマンとヒップホップ（ラップ）に共通する韻踏みが、彼らの社会変革の力の源泉では？

『ヒップホップ・モンゴリアー韻がつむぐ人類学』 島村一平著  
青土社、2021年（全421頁）

ヒップホップ・カルチャーがざわめく国としてのモンゴル、つまりヒップホップ・モンゴリアを描き出す試み。グローバル経済や政治腐敗に翻弄されながらも逞しく生きていくウランバートルの人々姿がラッパーたちの人生やヒップホップから伺われる。

- プロローグ
- 第一章 創世記—ポスト社会主義という混沌
- 第二章 群像—第一世代ラッパーたちの葛藤
- 第三章 伝統—口承文芸からヒップホップへ
- 第四章 憑依—ヒップホップからシャーマニズムへ
- 第五章 憤激—ゲッターに響く声
- 第六章 変成—今を生きる女性ラッパーたち
- 第七章 越境—ヒップホップが生んだ声の共同体
- エピローグ



# ヒップホップの国としての モンゴル

★人口350万人の国なのに、ヒップホップの曲がYoutube動画再生回数1000万回を超えることも

モンゴルの「固有の文化」と呼べるくらい進化

- ・モンゴル語ラップは、子音が三音以上連結（ありがとう）
- ・モンゴル語のラップは、口承文芸やシャーマンの精霊召喚歌に通底する頭韻も脚韻も両方使う高度な韻踏みの技術を持つ。
- ・ペントニック音階(民謡音階)のビートに合わせてラップ
- ・エスニック・ヒップホップの様相

+貧富の格差 環境問題 政治腐敗  
⇒ラッパーたちが吠える



特集  
シン・シャーマニズム論  
——カミとつながる技術



[ 目次 ]

- 003 特集  
シン・シャーマニズム論  
——カミとつながる技術
- 004 シン・シャーマニズム論  
——カミとつながる技術を再考する  
島村 一平
- 012 シャマンの楽器コブズ  
——その歴史と現在  
坂井 弘紀
- 018 ラクダ霊の真似と  
天界へのスピリチュアルな旅  
——クルグズ人の行者バクシ  
ダーヴィッド・シヨムファイ・カラ
- 028 ドラミングからライミングへ  
——モンゴル・シャーマニズムの「韻の憑依性」  
島村 一平
- 040 ユタと神の世界をつなぐ歌  
福 寛美
- 046 時空をこえるンピラの旋律  
——ジンバブエ、シヨナの憑依儀礼  
松平 勇二
- 054 神々の世界をのぞく窓  
——ウィチョルのベヨーテ幻覚と毛糸絵  
山森 靖人
- 064 「シャーマン」になった西洋人たち  
河西 瑛里子
- 070 「声」が聞こえる現象とは何か？  
——スピリチュアルと統合失調症のあいだの  
心理人類学〈前編〉  
ターニャ・M・ラーマン
- 076 フィールドワーカーの布語り、モノがたり 第6回  
エスニシティを象る装い  
——中国雲南省のモン衣装の移り変わり  
宮脇 千絵
- 084 日本万国博覧会記念公園シンポジウム 2023  
「日本人」の内と外  
——異文化接触を語り合う  
吉田 憲司/橋爪 節也/井上 卓一/ウスビ・サコ/  
中牧 弘允

表紙 モンゴルのラッパー、メヘ・ザハクイ

写真= O. Tugsbilig

文 = 島村 一平

写真提供・協力

東宝株式会社、米國議会図書館、László Kunkovác, Finish Heritage Agency、Injineash, Bor、古谷野昇、2025年日本国際博覧会協会、てるさん/PIXTA、アソシエ地図の資料館

本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。





ご清聴ありがとうございました。